

## 小学生の対象喪失の悲嘆経験と動物への態度との関連 — 生命尊重の教育に資するために —

濱野 佐代子

帝京科学大学

The relationships between grief experience and attitude to animals in schoolchildren  
— Study of education to respect life —

Sayoko HAMANO

As the trend of nuclear families increasing, especially in the last few years, the number of children experiencing the death of a close relatives decreases. Moreover, the educational problems related to bullying, suicides and juvenile crimes of the child are increasing.

The purpose of this research was to study 2 relationships, first between children's experience of grief and the respect for life and the second between children's experience of grief and the attitude towards animals.

In this research, elementary school students (N=219) completed a questionnaire. The results were as follows: (1) Analyzing with factor analysis (the main factor method; the promax rotated factor matrix), 6 items yielded 2 factors were selected to complete the measurement of attitude to animals. These factors were labeled as preservation of animals and kindness to animals. (2) Grief experience of close relative animals was related to preservation of animals and kindness to animals. Furthermore, attitude factors were evaluated by the attitude to animals scale scoring, and the following results were obtained; attitude to animal levels of the students who experienced grief was higher than the others.

The results of the present study suggest the possibility of using the loss of pets or animals that children are close to educate children on how to respect life.

Key word : Education to respect life, Grief experience, Kindness to animals, Schoolchildren, Pet-loss, Attachment

### 問題と目的

近年核家族化が進み、子ども達をとりまく環境が大きく変化してきた。祖父母同居の家族が減り、ほとんどの人が終末期を病院で迎えるため、子ども達が家庭内で近親者の死を経験することはほとんどなくなってきた。子ども達が家族の死を経験することは、死を理解することや「いのちの大切さ」を実感する重要な経験であると考えられる。一方、命を軽視したような青少年の犯罪が増加し、いじめや自殺の問題も深刻化している。そのような社会背景の中、子どもに対する「生命尊重」の教育の必要性が問われている。

小学校の道徳の学習指導要領には、各学年の生命尊重教育について以下のように記述されている。1、2学年では、生きることを喜び、生命を大切にすることを、3、4学年では、生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすることを、5、6学年では、生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する<sup>1)</sup>。このように、学習指導要領には、子どもの発達に応じて生命への態度を育成するよう

に述べられている。しかし、「生命尊重」を教育によって子ども達にどのように教えればよいのだろうか。例えば、いのちの大切さについて話し論じたり、生命尊重に関連する本を読み聞かせたりするだけでは、子どもたちはいのちを大切にしなければならないということを実感できないのではないだろうか。生命を尊重する心は、学んで獲得するものではないからである。心という目に見えない複雑な場所にアプローチすることは困難である。なぜなら、教育者側が提示した生命尊重の教材が、子どもにどのように影響して、どのような結果を導きだすのかは、個々に異なるだろうし、子どもはいのちを大切にしなければならないと頭では理解できたとしても、そのことを心で実感しないと意味がないからである。いのちの教育の方法は、「体験の共有」と「感情の共有」からなる「共有体験」である<sup>2)</sup>という指摘のとおり、生命尊重の心は、何らかの経験により育まれると考えられる。一方で、生命尊重教育には、生と死の両面を認識し学ぶことが重要である<sup>3)</sup>との指摘のとおり、生を実感し、死を知ることが、生命尊重の教

育のための両輪であると考えられる。多くの研究者たちが子どもへの死の教育の重要性を述べてきている<sup>3,5)</sup>

子どもたちが初めて遭遇する死別経験は、11歳から18歳までが一番多く、次に6歳から10歳までが多く、対象として一番多かったのが祖父母であり、次に動物が多かった<sup>4)</sup>。また、小学校時代の大切な人または動物との悲嘆を伴う死別経験はペットの死が最も多かった<sup>6)</sup>。このことから分かるように、子どもにとって、最初に経験する悲しみを伴う喪失経験がペットの喪失である。この悲嘆を伴う喪失経験ということが重要である。これは、対象喪失のことであり、それに伴う悲哀はきまって愛する者を失ったための反応である<sup>7)</sup>といわれている。幼児の親を対象に行った研究では、ペットとの死別(ペットロス)を経験し乗り越えた後に、子どもは、人格的に発達することが分かってきており、ペットロス経験は、共感性や責任感が養われたり、いのちの大切さを実感したり、情操教育に役立ったり、死について考える機会となっていた<sup>8)</sup>。以上から、人間が生きている以上避けられない親しい対象との死別経験こそが、死を考え「いのちの大切さ」を実感できる機会になるのではないかと考えられる。

一方、多くの小学校が、学校で動物を飼育して、生命尊重の教育を行ってきている<sup>9)</sup>。動物は人間よりも寿命が短いので、子どもたちは、親しい対象の生老病死を身近に経験できる。このように動物を介在させた教育を動物介在教育という。動物介在教育とは、動物とのふれあいを通して、子どもたちの心理社会的な発達や人格的成長を促すことである。生命を尊ぶということは、動植物や人間の生物学的な生命を大切にすることとともに、その生命のもつ不可思議さを知り、畏敬の念をもち、生きとし生けるものを慈しみ、何にもまして大切にすることを意味する<sup>10)</sup>ということからも、生命尊重の意識の表現型として、動物擁護の態度が考えられる。

そこで、本研究では、小学生の悲嘆を伴う死別経験が、生命尊重への意識や動物への態度に与える影響について明らかにすることを目的として調査を行った。

## 方法

### 手続き

東京都内の小学校に協力を依頼し、質問紙調査を行った。調査期間は、2011年1月であった。対象小学校にて集団調査を実施し、その場で回収した。

回収率は、全体で約94.7%であった。有効回答率は、87.3%であった。分析の統計処理は、SPSS for Windows ver.16.0を使用して行った。

### 対象者の属性

小学4年生58名(男性27名、女性31名)、小学5年生81名(男性42名、女性39名)、小学6年生80名(男性49名、女性31名)の219名であった。

### 質問項目内容

属性に関する質問項目は、学年、性別であった。

生命尊重に関する質問項目は、自分と他者、動植物に対する命の大切さについての項目を用いた。具体的には、「自分の命は大切にしなければならない」、「家族の命は大切にしなければならない」、「友だちの命はたいせつにしなければならない」、「知らない人の命は大切しなくてもよい(逆転項目)」、「動物の命は大切しなくてもよい(逆転項目)」、「植物の命は大切しなくてもよい(逆転項目)」の6項目であった。回答方法は、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の5件法を用いた。

動物に対する態度については、動物の種類をイヌとネコとニワトリを対象とした。家庭内で最も飼育されているペットがイヌであり、次に多いのがネコであることから、最も身近な動物を用いた。また、哺乳類以外では、ニワトリが学校飼育動物として多く飼育されていることからニワトリを用いた。動物に対する態度としては、好き嫌いの程度とかわいがるかどうかの程度、からかいのレベルから、叩く蹴るなどの暴力行為について質問した。具体的には、「イヌ(もしくは、ネコ、ニワトリ)がすきである」、「イヌ(もしくは、ネコ、ニワトリ)は、かわいがるべきだ」、「イヌ(もしくは、ネコ、ニワトリ)がいやがっていても、からかってよい」、「イヌ(もしくは、ネコ、ニワトリ)をたたいたり、けったりしてもよい」の12項目であった。回答方法は、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の5件法を用いた。

悲嘆を伴う死別経験に関する質問項目は、「大切な人や身近な人もしくは動物が死んでしまって、とても悲しい気持ちになったり、ショックを受けたりしたことがありますか<sup>6)</sup>」を人と動物に分けて小学生用に変更して使用した。具体的には、「たいせつな人や、みじかな人がしんでしまって、とてもかなしい気持ちになったり、ショックをうけたりした

ことがありますか。」と「たいせつな動物や、ペットが死んでしまって、とても かなしい気持ちになったり、ショックをうけたりしたことがありますか。」であった。回答は、「ある」「ない」「わからない」の単一選択肢を用いた。

## 結果

生命尊重に関する質問項目に関しては、多くの児童は、どの対象の命も大切にしなければならないと考えていた。しかし、知らない人の命については、「どちらともいえない」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」を含めると、全体の約 30.1% を占めていた。各回答の割合を図 1 に示す。小数点第一位以下は四捨五入した。

男女や学年の違いにより差異がみられるのかを検討するために、学年と性別を独立変数とし、自分と他者、動植物に対する命の大切さについての 6 項目を従属変数とする二要因の分散分析を行った。有意な主効果が認められた要因に対して、Tukey 法による多重比較を行った。その結果、植物の命の大切さでは、学年 ( $F(2,213) = 5.63, p < .01$ ) と性別 ( $F(1,213) = 11.6, p < .01$ ) に有意な主効果が認められた。女兒の方が男児よりも有意に高い得点を示し、

4 年生の方が 6 年生よりも有意に高い得点を示した。性別の主効果のみが有意であったのは、動物の命の大切さ ( $F(1,213) = 4.75, p < .05$ ) と、知らない人の命の大切さ ( $F(1,213) = 4.43, p < .05$ ) であった。両者ともに、女兒の方が男児よりも有意に高い得点を示した。学年と性別の交互作用は認められなかった。動物への態度の下位尺度得点の学年と性ごとの平均値を表 1 に示す。

イヌ（もしくは、ネコ、ニワトリ）を好きかどうかの程度について、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」に回答した人数を加算して好きとし、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」に回答した人数を加算して嫌いとして割合を比較した。82.8% の児童がイヌを好きであり、73.3% の児童がネコを好きであったが、61.1% の子どもたちはニワトリが嫌いであった。各回答の割合を図 2 に示す。小数点第一位以下は四捨五入した。

動物に対する態度に関する質問項目のうち、天井効果がみとめられた項目は、「イヌ（ネコもしくはニワトリ）をたたいたり、けったりしてはいけない」の 3 項目であった。この項目に関しては、回答の割合を検討した。どの動物に関しても、ほとんどの動物に対してたたいたり蹴ったりの暴力はしてはいけない



図 1 命の大切さへの意識 (%)

表 1 命の大切さの学年と性ごとの平均値 (標準偏差)

		植物の命の大切さ	動物の命の大切さ	知らない人の命の大切さ
4年生	男児 (n=27)	4.48 (.01)	4.74 (.66)	3.96 (1.11)
	女兒 (n=31)	4.97 (.18)	4.81 (.75)	4.13 (1.43)
5年生	男児 (n=42)	4.21 (1.12)	4.69 (.98)	3.90 (1.41)
	女兒 (n=39)	4.49 (1.19)	4.92 (.35)	4.10 (1.23)
6年生	男児 (n=49)	3.61 (1.63)	4.31 (1.34)	3.94 (1.34)
	女兒 (n=31)	4.48 (.89)	4.81 (.54)	4.68 (.70)

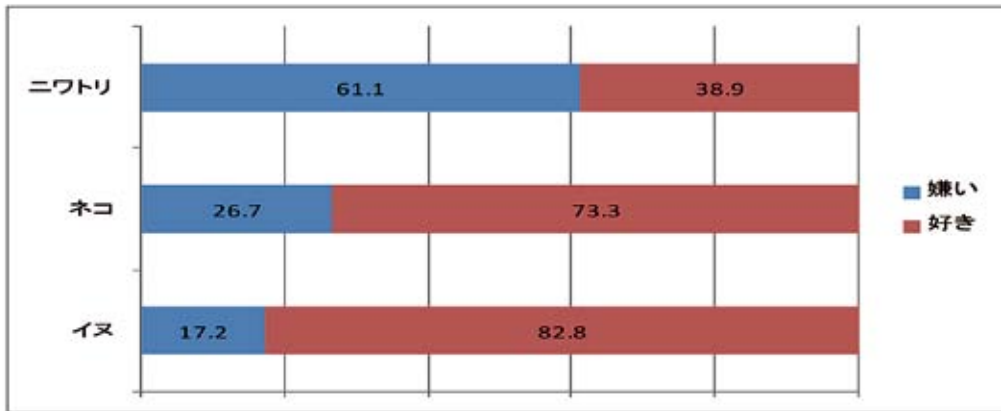


図2 動物の種類と好き嫌い (%)

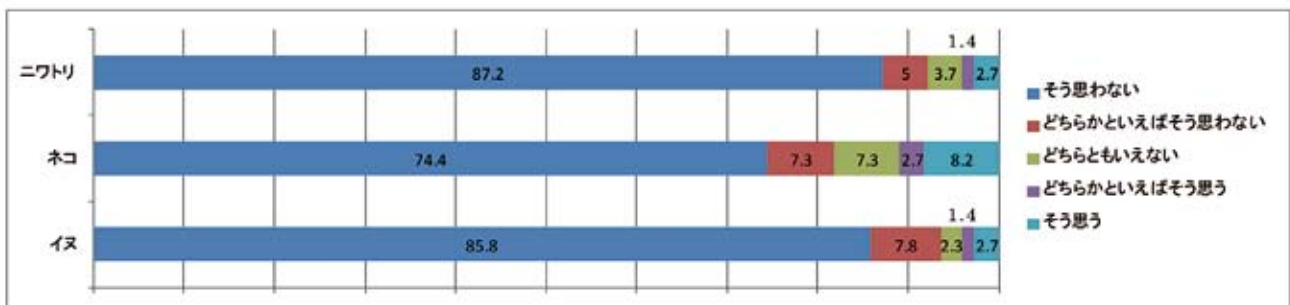


図3 動物をたたいたり、けったりしてもよいか (%)

表2 ネコ暴力許容別にみた好き嫌い (単位%)

ネコ	n	好き	嫌い
暴力許容	14	50.0	50.0
暴力非許容	158	77.2	22.8

注:  $\chi^2(1)=5.08, p<.05$

ないと考えていた。しかし、一方で、イヌで4.1%、ネコで10.9%、ニワトリで4.1%の児童が動物に対して暴力をふるってもよいと回答していた。各回答の割合を図3に示す。小数点第一位以下は四捨五入した。

また、ネコとニワトリにおいて、暴力の許容と好き嫌いの関連を検討するために、 $\chi^2$ 検定を行った。ニワトリへの暴力の許容と非許容別に好き嫌いを比較した結果、有意な差は認められなかった。ネコへの暴力の許容と非許容別に好き嫌いを比較したところ、5%水準で有意な差が見られた。結果を表2に示す。ネコへの暴力を許容していない児童は、ネコを好きな者が多かった。

動物に対する態度に関する質問項目のうち、上述の3項目を除外した7項目について因子分析(主因子法)を行った結果、初期の固有値基準(1以上)、因子間の固有値の差の相対的な大きさ、累積寄与率

から2因子が妥当と判断した。続いて、因子間に相関があることが予想されたので、因子軸の回転に斜傾回転(プロマックス回転)を用い、因子分析(主因子法)を実施した。負荷量の低い1項目を除外して、再び、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施した。累積説明率は58.4%であった。結果の解釈には、因子パターン行列を適用した。2因子からなる6項目の動物への態度尺度を作成した。因子名は、各因子の項目内容を参考にして命名した。第1因子は「動物保護」、第2因子は「動物愛護」と命名した。また、因子間相関を検討したところ、第1因子と第2因子との相関は $r=-.52$ であり、全ての因子間に高い相関が認められ、因子間は関連の強い動物への態度の特性であることが示唆された。尺度の信頼性は、Cronbachの $\alpha$ 係数を用いて検討した。 $\alpha$ 係数による分析では全ての因子で高い $\alpha$ 係数が得られた。各因子の $\alpha$ 係数は、第一因子が.64、第二因子.64であり、尺度の信頼性は十分高いと考えられた。また、尺度全体から各項目を除外したときの残りの項目による $\alpha$ 係数が、項目全体による $\alpha$ 係数より大きいかどうかを検討した。全項目の $\alpha$ 係数は、各項目を除外した $\alpha$ 係数よりも大きかった。各因子で、各因子項目を除外したときの $\alpha$ 係数は、各因子

表3 動物への態度について因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目	I	II	共通性
第1因子「動物保護」( $\alpha=.64$ )			
イヌがいやがっていても、からかってよい (逆転項目)	.85	.07	.67
ニワトリがいやがっていても、からかってよい (逆転項目)	.50	-.14	.27
動物の命は大切にしないでよい (逆転項目)	.44	-.05	.24
第2因子「動物愛護」( $\alpha=.63$ )			
ニワトリは、かわいがらるべきだ	.03	.87	.34
イヌは、かわいがらるべきだ	-.01	.48	.22
ネコは、かわいがらなくてもよい (逆転項目)	.17	-.43	.72
累積寄与率	41.2	58.4	
因子間相関	I	II	
	I	-0.52	
	II	-	

表4 動物への態度下位尺度の学年と性ごとの平均値 (標準偏差)

		第1因子「動物保護」	第2因子「動物愛護」
4年生	男児 (n=27)	4.52 (.84)	4.12 (.88)
	女児 (n=31)	4.80 (.45)	4.41 (.74)
5年生	男児 (n=42)	4.51 (.70)	3.75 (1.07)
	女児 (n=39)	4.61 (.66)	4.01 (.75)
6年生	男児 (n=49)	4.02 (1.16)	3.62 (.92)
	女児 (n=31)	4.58 (.82)	4.08 (1.12)

の $\alpha$ 係数より高くなることはなく、その項目と因子の相関が高いと考えられた。因子分析の結果を表3に示す。

動物への態度について男女や学年の違いにより差異がみられるかを検討するために、学年と性別を独立変数とし、2つの下位尺度得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った。下位尺度得点は、項目平均値を算出した数値を用いた。その結果、学年と性別の主効果が有意となった。学年と性別の交互作用は認められなかった。学年では、第1因子「動物保護」の下位尺度 ( $F(2,213) = 3.43, p < .05$ ) と第2因子「動物愛護」の下位尺度 ( $F(2,213) = 4.00, p < .05$ ) に有意な主効果がみとめられた。その後の多重比較 (Tukey法) の結果、4年生の方が6年生よりも、5年生の方が6年生よりも有意に高い「動物保護」の下位尺度得点を示した。また、4年生のほうが5年生や6年生よりも有意に高い「動物愛護」の下位尺度得点を示した。性別では、女児の方が、男児よりも第1因子「動物保護」の下位尺度得点が有意に高かった ( $F(1,213) = 7.46, p < .01$ )。また、女児の方が、男児よりも第2因子「動物愛護」の

下位尺度得点が有意に高かった ( $F(1,213) = 6.77, p < .05$ )。動物への態度の下位尺度得点の学年と性ごとの平均値を表4に示す。

悲嘆を伴う死別経験と動物への態度との関連について明らかにするために、悲嘆を伴う動物との死別経験と、悲嘆を伴う人との死別経験を独立変数、動物への態度の下位尺度得点を従属変数とした検討を行った。分析方法は、一要因の分散分析を行い平均値の差の検討を行った。有意な主効果が認められた要因に対して、Tukey法による多重比較を行った。

悲嘆を伴う動物との死別経験では、第1因子「動物保護」の下位尺度 ( $F(2,216) = 8.01, p < .001$ ) と第2因子「動物愛護」の下位尺度 ( $F(2,216) = 10.42, p < .001$ ) に有意な主効果がみとめられた。その後の多重比較 (Tukey法) の結果、悲嘆を伴う動物との死別経験がある方が、経験がない、わからないよりも有意に高い「動物保護」、「動物愛護」の下位尺度得点を示した。悲嘆を伴う人との死別経験では、有意差が認められなかった。結果を表5に示す。

表5 悲嘆を伴う動物死別経験と動物への態度との関連：分散分析結果

因子	動物死別経験	N	得点平均値	(SD)	F値(多重比較)	有意水準
第1因子「動物保護」 (n=219)	①動物悲嘆経験あり	119	4.66	.68	F(2,216)=8.01 (①>②・③)	p<.001
	②動物悲嘆経験なし	30	4.07	1.13		
	③わからない	70	4.31	0.92		
第2因子「動物愛護」 (n=219)	①動物悲嘆経験あり	119	4.21	.82	F(2,216)=10.42 (①>②・③)	p<.001
	②動物悲嘆経験なし	30	3.69	1.09		
	③わからない	70	3.63	.97		

## 考察

本研究は、小学生の悲嘆を伴う死別経験が、生命尊重への意識や動物への態度に与える影響について明らかにした。

生命尊重の意識では、自分や身近な人の命、動物の命について、ほとんどの児童が大切にしなければならぬと強く感じていた。それに比較して、知らない人の命はどちらともいえない、大切にしないでよいという回答が多かった。この傾向は、男児の方が女児よりも強かった。このことは、児童が身近な人と縁遠い人の命の大切さについて区別していることが分かった。この点に関しては、対象との愛着や関係性についてさらに調査する必要があると考えられた。

動物の種類による好き嫌いの程度は、イヌとネコはほとんどの児童が好きと回答した一方、ニワトリに関しては多くの児童が嫌いと回答していた。日本における家庭内飼育動物の種類は、イヌが62.4%と一番多く、次にネコが29.2%であり<sup>11)</sup>、イヌやネコはペットとして多く飼育されていることから分かる。ニワトリは、多くの小学校で飼育されているにもかかわらず、児童はあまり好きではないという結果であった。また、ニワトリとネコへの暴力の許容と非許容別に好き嫌いとの関連を検討した結果、ニワトリでは暴力許容と好き嫌いに関連はなく、ネコに暴力をふるってはいけないと考えている児童の多くは、ネコが好きだった。以上から、ニワトリへの暴力に好き嫌いとは関係しなかったが、動物への愛着は動物飼育の基盤となるので、多くの児童がニワトリを嫌っているという結果から、教員の学校動物飼育への関わらせ方の態度や環境、もしくは動物種の選定について考慮する必要があるといえる。

動物への暴力では、ほとんどの児童が行ってはいけないと答えていた。しかし、若干名の児童が暴力をふるってよいと回答していた。国内外で問題とされている青年や児童が人を殺傷した事件では、必ず

と言っているほど以前に動物虐待を行っているケースが多い。人とペットや動物との関係は、自分の対人関係の方略が投影されることがあると考えられる<sup>12)</sup>。また、ペットと子どもたちが共有する利益や問題は、家庭内の現在の危機もしくは迫り来る危機のシグナルとなる<sup>10)</sup>というように、人とペットや動物との関係の間に生じる問題、たとえば、暴力や無視、ネグレクトは、その子ども自身や家庭、環境の危機シグナルとなる場合がある<sup>12)</sup>と考えられるので、動物への態度を手掛かりとした子どもへの介入が必要であると考えられる。

動物への態度について、因子分析を行った結果、動物保護と動物愛護の因子が抽出された。動物への態度は、保護と愛護という2側面からなることが分かった。また、動物への態度については、性別と学年の違いが見出された。女児の方が男児よりも動物保護と動物愛護への意識が高かった。小学生を対象とした共感性と愛他性の調査では、女児の方が男児よりも共感性と愛他性が高かった<sup>13)</sup>。本研究の動物保護や愛護は、共感性や愛他性の表出の一部と考えられるのでこの知見と一致する。学年差に関しては、4年生の方が6年生よりも、5年生の方が6年生よりも動物保護への意識が高かった。また、4年生の方が5年生や6年生よりも動物愛護への意識が高かった。いのちの教育の実践を考える上で、もっとも重要な発達の転換点は10歳から12歳のころである<sup>2)</sup>という指摘の通り、動物を用いて、いのちの教育を行う場合は、発達差を考慮しなければならないと考えられた。また、この転換期を境として、いのちの教育内容に違いが求められ、小学校低学年くらいまでは自然、家族、動物、植物などとのふれあいを深め、五感を通じて体感する<sup>2)</sup>ということからも、動物とのふれあいによって、動物の保護や愛護の心を育ませるためには、小学校高学年以下からの実施が一番効果的であることが示唆された。

悲嘆を伴う大切な人や動物との死別経験と動物へ

の態度との関連については、大切な動物との死別経験と、動物への態度との間に有意差が見出された。悲嘆を伴う動物との死別経験がある児童の方が、経験がない、わからない児童よりも動物保護や動物愛護に対する意識が高かった。愛着対象の喪失は、悲しみを伴うが、その経験が、死や命について考えた人格的成長をもたらしたりすることが明らかにされている<sup>14-16)</sup>ことから、大切な動物との死別経験が、動物への態度に影響を与えていたと考えられた。しかし、一方で、動物への態度に関しては、悲嘆を伴う大切な人との死別経験は関連がなかった。

生命尊重やいのちの大切さを子どもたちに教育したり、教えたりすることは難しい。しかし、学校や家庭、地域の様々な場面で取りまざるを得ない重要な課題である。生命尊重の教育には、生と死の両面からのアプローチが重要である。特に、死の経験、とりわけ悲嘆を伴う死別経験が子ども本人の心に強く影響を及ぼすと考えられる。身近な人との死別体験の“有無”が個人の死に対する態度に明確な差異をもたらすのは児童期までである<sup>17)</sup>という指摘の通り児童期までに子どもの発達を考慮した死の教育を含めた生命尊重の教育を行うことが肝要であると考えられる。

死別経験は誰にも避けられず、いつ起こるか分からない。そのような状況に立ち会った大人たちは、子どもの心に敏感に反応し、子どもが自由に表現できる場所を与え、支える安全基地になり、共に死を悼むことが本来の生命尊重やいのちの大切さを子どもたちに伝えることになるのではないかと考える。

## 引用文献

- 1) 文部科学省：小学校学習指導要領, 文部科学省, 2008.
- 2) 近藤卓：いのちの教育の理論と実践, 金子書房, 東京, 2007.
- 3) 得丸定子, 田原加津江, 嵐美香：学校教育における「死の教育」：死に対する意識調査から見た学校教育とのかかわり方. 日本家庭教育学会誌, 43 (1) :1-7, 2000.
- 4) 尾上明子, 菊池伸二：「子どもと死」の問題. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 19:53-75, 1997.
- 5) 坂田和子, 牧正興: Death Education Program の導入時期に関する検討. 福岡女学院大学紀要, 6:23-27, 2005.
- 6) 得丸定子, 吹山八重子：悲嘆を伴う死別に関する意識調査 - 小・中・高等学校の児童・生徒を対象として -. 日本家庭教育学会誌, 47 (4) :358-367, 2005.
- 7) フロイト [著]; 井村恒郎, 小此木啓吾 [ほか] 訳: 自我論・不安本能論 フロイト著作集 6. 人文書院, 東京, 1970.
- 8) 濱野佐代子: 幼児の動物の死の概念と, ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究 - 幼児の死の概念とペットロス経験の関連 -. 発達研究, 22:23-36, 2008.
- 9) 鳩貝太郎, 中川美穂子: 学校飼育動物と生命尊重の指導. 教育開発研究所, 東京, 2003.
- 10) 文部科学省: 小学校生命を尊ぶ心を育てる指導, 文部科学省, 1988.
- 11) 内閣府: 動物愛護に関する世論調査 調査結果の概要, 内閣府, 2003.
- 12) 濱野佐代子: 第 15 章 コンパニオンアニマルと子育て支援. 繁多進 (編著), 子育て支援に生きる心理学, 新曜社, 東京, 2009, pp173-182.
- 13) 首藤敏元: 児童の愛他性における共感性と道徳的判断の役割. 埼玉大学紀要, 39 (1) : 59-72, 1990.
- 14) Deeken, A.: 特集日本人の死生観・悲嘆のプロセスを通じての人格的成長. 看護展望, 8 (10) :881-885, 1983.
- 15) 東村奈緒美, 坂口幸弘, 柏木哲夫: 死別経験による遺族の人的成長. 死の臨床, 24 (1) :69-74, 2001.
- 16) Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G.: The Posttraumatic Growth Inventory :Measuring the Positive Legacy of Trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9 (3) :455-471, 1996.
- 17) 丹下智香子: 青年前期・中期における死に対する態度の変化. 発達心理学研究, 15 (1) :65-76, 2004.